

2015年11月29日 主日礼拝メッセージ

聖書：ルカの福音書1章5～23節

説教：主のために用意する者

はじめに

これから四回にわたりルカの福音書を開き、イエスの誕生にまつわる聖書の記事を見て参ります。今日開いている箇所、先ほど司会者に読んでいただきましたが、皆さんはどのように聞いたでしょうか。クリスマスのメッセージですから、当然イエスがお生まれになるときのことであろうと期待していたら、別の人のことなので混乱した方もいるのではないのでしょうか。

ここに出て来るザカリヤはどんな人であったのか。そのザカリヤの子として生まれるヨハネは何をするために生まれてくるのか。そのことを見て参ります。

1 祭司ザカリヤとエリサベツ

1) アビヤの組の者

5節を見ると、ザカリヤはアビヤの組の者であったとあります。これは少し説明が必要で、第一歴代誌24章を開くとそのあたりの事情が載っています。モーセの兄であるアロン、そのアロンの子孫は代々主の宮に奉仕する役割が与えられていましたが、ダビデの時代にその人数が多くなってきたため、二十四の組に分け、主の宮の奉仕を分担するようになったとあります。アビヤの組とは、二十四に分けられた組のうちの八番目の組のことで、ザカリヤはそこに属していたということです

2) 神の御前に正しく踏み行っていた

そのザカリヤと妻エリサベツの信仰につ

いては、6節にあります。「ふたりとも、神の御前に正しく、主のすべての戒めと定めを落ち度なく踏み行っていた。」

主の御前に正しい人であったとありますが、もちろん罪がなかったという意味ではありません。ザカリヤもエリサベツも罪人であったことには変わりがありません。主の宮での奉仕は、すべて厳格に手順が定められています。祭司は、その手順に従わなければなりません。もし自分勝手な方法で奉仕するならどうなるか。かつてそんなことをした者がいました。彼は主のさばきを受け命を落としてしまいました。それほど厳しものだったのです。ザカリヤは夫婦ともども、主が定められた祭司の奉仕を忠実に守り行っていたということです。

3) 香をたく：祈り

このとき、ザカリヤは香をたくために神殿に入ります。その外では大ぜいの人々が集まり祈っていたとあります。

ところで少し話が変わるのですが、今、私たちは香をたいはしません。それはどうしてでしょうか。黙示録5章8節には「この香は聖徒たちの祈りであった」とあります。香をたくことと祈りには深い関係があります。イエス・キリストが罪のなだめの供え物としてご自分のからだを十字架でささげてくださいましたことにより、すべての旧約の律法が成就されました。それがあって、私たちはもう香をたく必要がありません。その代わりに祈りをささげることによって、旧約の

定めをきちんと守り行っていることになり
ます。

それはさておき、ザカリヤが香をたいてい
るとき御使いガブリエルが突然現れました。
混乱するザカリヤに対しガブリエルは、妻の
エリサベツに男の子が生まれるのだと告げ
るます。ところがザカリヤにはガブリエルの
ことばがにわかに信じられませぬ。そこで
18節でこう言うのです。「私は何によってそ
れを知ることができましよう。私はもう取り
寄りですし、妻も年を取っております。」

旧約聖書には、年をとってから子供が与え
られた人たちのことが書かれています。その
代表がアブラハムとサラでしょう。彼らは、
年をとり子供を産めるようなからだではな
かったのに、神の約束どおりにイサクという
子が与えられました。もちろんザカリヤはそ
のを知っていたはずでせぬ。しかし、まさ
かアブラハムと同じことが自分にも起きる
とはとうてい思えぬ。そこで素直に自分の
気持ちを口にしました。「信じられませぬ。
その証拠を見せてください。」そうしたら、
ガブリエルはこう言います。20節。「ですか
ら、見なさい。これらのことが起る日まで
は、あなたは、ものが言えず、話せなくなり
ます。私のことばを信じなかつたからです。
私のことばは、その時が来れば実現します。」

「信じられない」と素直に口にただけな
のに、ガブリエルにものが言えないようにさ
せられてしまった。なんとも複雑な思いにな
ります。とは言え、考えようによっては、こ
こは私たちには慰めとなるところでもあり
ます。

4) 口がきけなくなったのは罰なのか

どこが慰めであるのか。ザカリヤは神の御

前に正しく、主のすべての戒めと定めを落ち
度なく踏み行っていました。そのような高い
評価をいただいていたザカリヤでも、主のみ
ことばが信じられないと言いまいました。

私たちも、聖書に書かれている約束を信じ
ることが難しく感じられるときがあります。
信じられないと言いながら、同時にこんな自
分ではいけない。もっと信じられる人になら
なければ、とも思う。ところがいつまでたつ
ても信じられないままです。そんなことを
くり返しているうちに、「私は駄目クリス
チャン」というレッテルを自分に貼って苦し
むことがあります。

ザカリヤを見てください。彼でさえ信じら
れなかつたのです。そんなザカリヤに神はど
うされましたか。信じないから約束は反故に
します。約束は取り消しますと言いましたか。
いいえ。「私のことばは、その時が来れば実
現します」と言われました。信じようが信じ
まいが、約束は実行されるのです。ですから
私たちはひとまず安心してよい。

でも、口がきけなくなったことはどうで
しょう。あれは不信仰に対する罰ではないの
か、そんなふうに見えたかもしれませぬ。で
もガブリエルは、喜びの訪れを伝えるために
来たと言っています。であれば、口がきけな
いということも喜びと関係しているはずで
はないですか。

私は変なことを言っているでしょうか。ザ
カリヤは口がきけない状態になり、当然のこ
とですが、口がまた元のようにきけるよう
にと祈らされていきます。元に戻るのはいつ
ですか。ガブリエルが語つたことばが実現す
るときです。そうするとザカリヤは、ガブ
リエルの話は信じられないと言っていられな
くなる。自分が元の状態に戻るためには、否が

応でも信じなければなりません。

ですからこれは罰というのではありません。神はこのような方法を用いて、信じられないと言う者を信じて祈るようにと導いておられると見るができると思うのです。

2 ヨハネの役割

1) エリヤの霊と力

次に、ザカリヤに生まれてくる子供のことを見ます。17節。「彼こそ、エリヤの霊と力で主の前触れをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです。」

ここで預言者エリヤの名前が出てきます。そのことは少し説明が必要で、マラキ書4章5、6節に書かれています。「見よ。わたしは、主の大いなる日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、この心をその父に向けさせる。」

マラキ書が書かれたのはイエスが来られるときからさかのぼって450年前と考えられています。マラキが語ってからずっと人々はこのみことばを信じ、神は必ず預言者エリヤをもう一度イスラエルに遣わしてくださると待ち望んでいました。世の中が暗くなればなるほど人々の期待は強くなっていきます。そんなとき、ガブリエルはザカリヤの前に現れて、マラキ書の言葉がいま実現しようとしていると語りました。

2) 主のために用意する：喜び

そのヨハネは、主のために用意するという役割が与えられていきます。彼は後に洗礼者ヨハネと呼ばれるようになり、ヨルダン川のほとりで罪の悔い改めを叫び、水でバプテスマ

マを授け、そのようにして主イエスが来られる道をまっすぐに整える働きをしていきます。

でもなぜ、そんな順番をとるのでしょうか。イエスが私たちを救って下さるといふのなら、ヨハネはいてもいなくても大して変わりがないはずです。しかし神はイエスを遣わす前に、ヨハネを遣わすことにしました。なぜそうするのか、必ず理由があるはずです。

13、14節にヒントがあります。「こわがることはない。ザカリヤ。あなたの願いが聞かれたのです。あなたの妻エリサベツは男の子を産みます。名をヨハネとつけなさい。その子はあなたにとって喜びとなり楽しみとなり、多くの人もその誕生を喜びます。」

ザカリヤはずっと男の子が欲しいと願ってきたので、今その願いが聞かれたとガブリエルは語りました。しかし話はそこで終わりません。「多くの人もその誕生を喜びます」とあります。ヨハネの誕生は、他の人々にとっても大きな喜びとなると言っています。もはやザカリヤ個人の喜びではなく、イスラエル全体の喜びに拡がっていきます。

御使いガブリエルがどんなときに現れたのか、思いだしてください。ザカリヤが神殿に入って香をたいていたときです。香をたくことは祈りと同じであると言いました。事実、神殿の周りには大ぜいの民が集まり祈っていました。どんな祈りだったのでしょう。マラキ書に書かれたみことばを信じている人々の祈りです。「見よ。わたしは、主の大いなる日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。」神がイスラエルに預言者エリヤを遣わしてくださる。それを見させてください。そうすれば主の大いなる日がもうすぐ来ることが私たちにわかりますから。人々

はこう祈っていました。

ザカリヤは口がきけなくされることで、自分が祈っていた祈りが神に聞かれていることを学ぶ機会とされていきました。いっぼうイスラエルの人々は、ヨハネが先に生まれることにより、自分たちの祈りが神に確実に聞かれていことを学んでいきます。神は見捨てておられない。神はみことばを必ず成し遂げる。

主が来られる前に、まずヨハネが遣わされる。どうしてそんな順番なのでしょう。私たちに喜びを知らせるためではないですか。もしヨハネが遣わされず、救い主がいきなり来ていたらどうなっていたのでしょうか。神が与えてくださる救いの恵みがあまりにも大きすぎて、人々は受けとめることができません。主が何をしておさったのか、主が何を語り下さっていたのか。ほとんどわからない。そうするとせっかくの喜びもわかりません。だからあらかじめヨハネが遣わされます。主が与えてくださる喜びを私たちが十分に味わうことができるよう、主はそこまで配慮して下さったのです。神の愛に感謝したいと思います。